

《論文》

D・ナツァグドルジの手稿「黒い岩」のデジタル解析

芝山 豊

はじめに

小論は、ダシドルジーン・ナツァグドルジ(1906-1937)の手稿 *Kharankhui Khad*(「黒い岩」)のデジタル化とコンピュータによる解析の結果を報告するものである。併せて、手稿のデジタル化がモンゴル現代文学のテキスト批判に有効な方法であることを示し、モンゴルの貴重な文化財である現代文学の手稿に差し迫った散逸や消滅の危険を回避し、研究を深化させるためには、デジタル化が不可欠であることを訴えるものである。

尚、小論は、2006年8月、ウランバートルで行われた第9回国際モンゴル学会議における英語口頭発表を基にしているが¹⁾、日本語での文章化にあたり、発表後の知見を若干付加した。

I 手稿「黒い岩」

D・ナツァグドルジの短編小説「黒い岩」は、作家がヨーロッパから帰国後、本格的な創作活動に入った時期に書かれた短編小説の一つである。最初は1930年に書かれ、1930年代、死の直前まで数度にわたって手を入れたものと考えられる。エドガー・アラン・ポオの影響下に書かれたとも言われ、モンゴル文学史上最初の一人称人称代名詞による語りを用いた画期的な作品である。その文学史上の特質にもかかわらず、テキストの定本化には多くの問題がある。

1935年、1945年の作品集には掲載されず、

1955年版『ナツァグドルジ選集』、1961年版『作品集』、1996年版『全集』、2004年版『選集』、2006年版3巻本『全集』に収録されている。

テキストの普及に最も大きな影響をもったのは1961年版の選集である。1961版と1955年版の異同は既に手稿研究の重要性を示すものであったが、手稿が自由な研究対象となるのには時間がかかった。1970年代後半に新たな手稿研究が開始され、1980年代には、1961年版が手稿の結末部分を省略したものであることが明らかにされた。

1996年版以降の「全集」は1980年代以降の手稿研究の成果を基に出版されたものである。結果として、出版物の中には、相反する2種類の結末をもつ3種類のテキストと、「黒い岩」から派生したもう一つの物語のテキストが存在する²⁾。

手稿は1988年に一度、不完全な形で出版されているが、不鮮明なファクシミリ版では手稿の実体を伝えることはできなかった³⁾。

2006年、ナツァグドルジ生誕100周年にあたり3巻本の全集が発行された。キリル文字による作品と資料集に続く3巻目は、*Д.Нацагдоржийн гар бичмэлийн цахим хуулбар*と題された手稿による作品集となっている⁴⁾。この画期的な手稿作品集は、1988年のファクシミリ版とは比較にならない上質なものだが、残念ながら、モノクロ印刷であり、手稿研究の材料としては十分とは言えない。

何故なら、図1に示すように、この手稿には、色調の異なる、少なくとも6種類以上(黒インク、黒鉛筆、赤インク、赤鉛筆、青インク、青鉛筆、)

図1

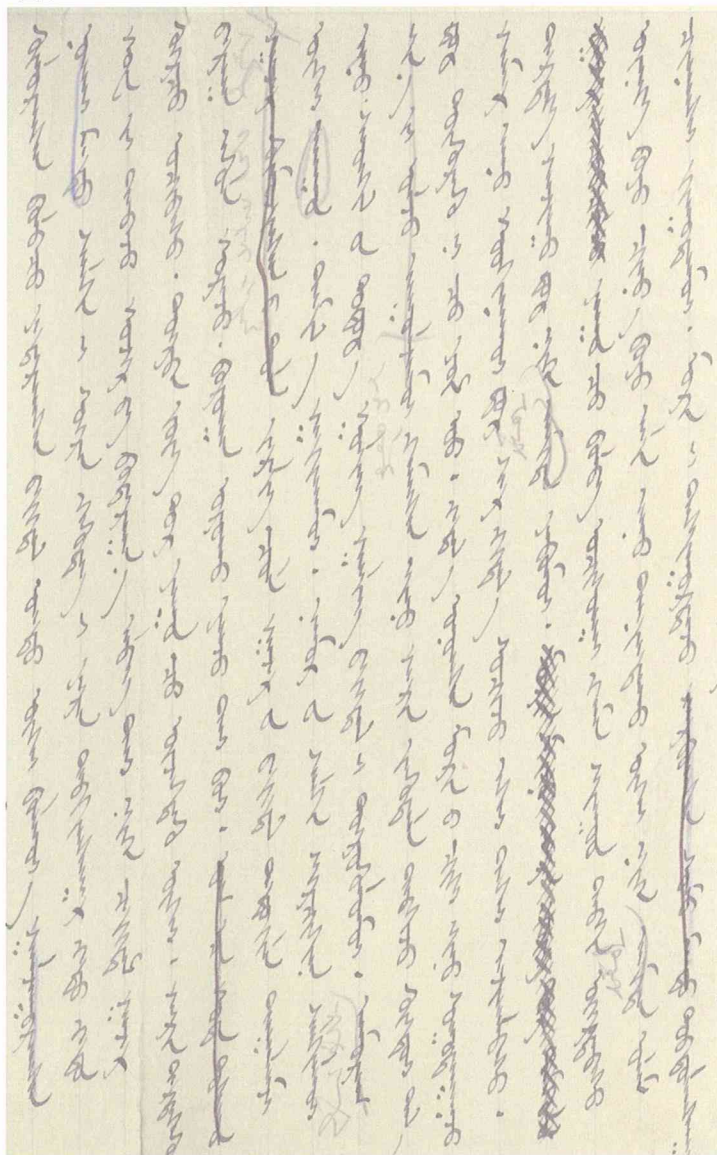


図4



図5



図8



図6

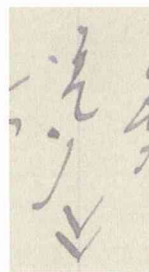


図7

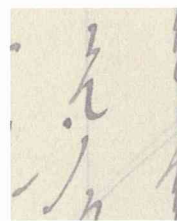


図2



図3



の筆記用具による加筆訂正があるからである。

手稿の精緻な研究のためには、モンゴル国立科学アカデミー言語文学研究所に保管されている手稿オリジナルを検討することが必要である。

加えて、手稿最終頁の末尾には黒く塗りつぶされた7行の削除箇所がある。この7行については、「削除部分は小説の一部か」、「削除は作家自身によるものか」、「作家本人でなければ、誰が何の目的で削除を行ったのか」等々の様々な議論を呼んできた。1980年代からモンゴルの研究者の一部には、削除部分を復元することができれば、この作品の真実の姿に迫れるのではないかという期待が生まれていた。そして、その期待は、日本の高度な科学技術へと向けられたのである。

II 紫外線蛍光スキャンとデジタル解析

手稿研究の意義が明らかになり、資料独占といった問題が完全になくなったとしても、多くの研究者が長時間オリジナルの手稿にアクセスすることはできない。

同じモンゴルの文化財でも、17世紀の古文書などと違い、近現代の文学作品は歴史に耐え得るような用紙に書かれていない。しかも、手稿は湿度管理など全くなされていない粗末なロッカーに保存されており、常に散逸、消滅の危機に晒されている。

ナツアグドルジの手稿研究をさらに深化させるためには、手稿を汚損の危険に晒すことなく、丹念に検討し、さらに、失われた部分を復元することのできる最も効果的な方法を考えねばならなかった。

この課題への大きなヒントとなったのはヴァチカン教皇庁図書館の「パリンプセスト・プロジェクト」であった。

パリンプセスト (Palimpsest) とは、何度か上書きされた羊皮紙 (特殊処理された動物の皮) の

写本のことである。紙がまだ普及していない時代、西洋では羊皮紙が一般的に使われていたが、羊皮紙は作るのに複雑な工程を要するため、時には同じ重さの金と交換されるほど高価なものであったという。そのため不要となった文字を洗い流したり削ったりしてから新しい文書を上書きしていた。表面の文書とは別の重要な古文書が肉眼では見えない部分に隠されている可能性がある。プロジェクトは、最新の紫外線スキャン技術とコンピュータ解析技術を駆使して、パリンプセストに隠された文字を読み解こうとするものであった。

この方法により、図2の朝日新聞記事(2005年3月2日1面)の左側の写真が示す通り、削り取られたはずの文字が鮮やかに浮かび上がり、プロジェクトは大きな成果をあげた。

このプロジェクトはヴァチカンと日本の凸版印刷株式会社が共同で行ったものである。幸い、このプロジェクトでも使用された紫外線蛍光スキャナの開発に計画当初から携わった長野県内のベンチャー企業、アイメジャー代表の一ノ瀬修一氏の協力を得ることができた。ナツアグドルジ手稿の模擬サンプルを作製して、一ノ瀬氏の開発した紫外線蛍光イメージスキャナ、FLSCANを用いて、予備実験を行うことにした。

模擬サンプルによる予備実験は以下のような手順で行った。

まず、藁半紙に4種類のインクで文字を記入して1週間放置。その後、書いた文字を塗りつぶし、目視では判読不可能であることを確かめ、通常のイメージスキャナと紫外線蛍光イメージスキャナで画像を取り込み、コンピュータで画像処理して、コントラストを向上させた。

この実験の結果、従来、復元が不可能とされていた黒い文字を黒いインクや墨汁で消した場合でも、条件によっては、元の文字がパリンプセストの場合同様に浮かび上がることが判明した。

長野での模擬サンプル予備実験の成果をもと

に、ウランバートルのモンゴル国立科学アカデミー言語文学研究所と交渉、実際の手稿を用いてデータを取得して解析を行うことが決まった。

しかし、2005年夏、実際にスキャナをウランバートルに持ち込んでみると、科学アカデミー言語文化研究所の電気設備は老朽化しており、コンピュータとスキャナに電源供給することすらままならない状態で、取得データの信頼性に問題が生じることとなった。

そこで、2006年の春、科学アカデミー言語文学研究所所長 Kh. サンビルデンデブ博士を東京に招き、ヴァチカンで用いられたものとはほぼ同様の装置を使用して、紫外線蛍光スキャンを行い、あわせて、他の方法も試みることにした。

実験に使用した紫外線蛍光スキャナは、通常、厚みのある本に対応するように設定されているが、今回は図3のような設定で使用した。可視光については、通常のフラットベッド式のスキャナを使用し、紫外線反射と透過、赤外線反射と透過、可視光反射と透過の各データ取得後、コンピュータ解析と目視による判別を行った。

III 実験の結果

残念ながら、「黒い岩」の紫外線蛍光スキャンからだけではヴァチカンの羊皮紙のような劇的な成果を得ることはできなかった。

しかし、この実験を通して、幾つかの貴重な発見があった。

ひとつは、末尾7行の塗りつぶし箇所 성격が浮き彫りとなったことである。

塗りつぶしは、一度ではなく2回以上、数度にわたって文字に沿って完全に文字が読めなくなるまで執拗に行われたことが証明された。

こうした塗りつぶしによる削除の方法は「黒い岩」の中では、この箇所以外には見られない。この注意深い塗りつぶしは単に推敲や校正のために

行われたのではなく、この箇所を一切人目に触れさせないようにする何らかの必要があって行われたと考えるべきであろう。

誰がいかなる理由でそれを行ったかについて議論するのは尚早である。

まず、塗りつぶしを行った人物が意図的に残した最後の1行に注目せねばならない。この部分には、ドイツ語で *Phantastische erzählung* (Novelle) と書かれている。

つまり、塗りつぶしの箇所は小説本文の一部をなすものではなく、小説に関するコメント部分である可能性が高い。他の手稿の塗りつぶし部分も多く、作品の一部ではなくコメント部分と推定される部分である。また、ナツアグドルジ手稿の一部では、コメントは作家本人以外によって書きこまれていることがままたある。

まず、この7行が誰によって書かれたのかをはっきりさせる必要がある。

幸い、図4に示した、塗りつぶし部分の透過スキャンのデータによって、紙の表裏両面を使用している手稿の当該部分では、裏面に書かれた文字と表面の行が重なっていないことが確かめられた。

塗りつぶしと文字部分には微妙な濃淡の差があり、デジタル画像のRGBのヒストグラムを調整することによって、文字の一部をわずかながら判読することが可能である。例えば、図5に見られる、塗りつぶし部分7行目の行頭の語に注目すると、塗りつぶし部分からはみ出したモンゴル文字のハネの部分と文字の一部によって、筆跡を推定することができる。

結論として、削除部分も本文を書いた人物と同じ人物によって書かれたことはまず間違いない。

文字を書いたインクとほぼ同じ組成のインクで塗りつぶしが行われたとみられるが、そうしたことを根拠に、ナツアグドルジ自身が塗りつぶしを行ったとすることはできない。例えば、

「フォークロア」というタイトルをつけたナツアグドルジの手帳の中には、こうした塗りつぶしの削除箇所は一箇所も見られないのである。

また、デジタル画像の検討は新たな事実を明らかにした。それは、この作品のヒロインの名前に関する問題である。

作品の出版された各テキストには、ニーナとイーナという名前が使われている。このヒロインの名前は、作品が作家の実人生とどのような関係にあるかをめぐる論争とも関連している。

実際、奇妙なことに、手稿の中には、1人の登場人物に対して、ニーナとイーナの2種類の記述がある。図6に示す最初にニーナと書かれた1箇所を除いて、すべて、図7のようにイーナと書かれている。

ニーナと書かれている部分を見ると、モンゴル伝統文字でイとニを区別する点は、遠目には分からないが、青いインクでうたれているように見える。

これを同じく青いインクによって欄外に署名つきで書かれたソドノム氏の書き込みと同じものだと、ソドノム氏による改竄であるとする説がある。

しかし、今回のデジタル画像によって、図8のソドノム氏の手稿欄外への書き込み部分と点の箇所を比較してみると、RGB、CMYKとも、それぞれの色の要素割合が一致しないことが判明した。

この事実は、イーナをニーナとする点の書き加えは、作品がニーナとの別れを経験した後に書かれたと主張するソドノム氏の書き込みと同時に行われたわけではないことを示している。既にニーナと書き直されていることを前提に、ソドノム氏の書き込みが行われた可能性も排除できない。

現段階では、「誰が、いつ、どのような意図で、点を書き加えてイーナをニーナに変更したのか」についての確実な答えはない。

今後、ナツアグドルジの筆跡に精通したモンゴル人研究者による解明を待たねばならない。しかし、そうした研究のためには、多くの研究者が直接手稿にアクセスする必要がある。極めてもろく壊れやすい状態にある手稿のデジタル化の重要性がまさにここにある。デジタル化された画像により、オリジナルの手稿が汚損されることなく、より多くの研究者に手稿の実像が共有されることで、研究は大いに深化するはずである。

我々が作成した手稿「黒い岩」のデジタル化データはモンゴル国立科学アカデミー言語文学研究所を通じて公開される予定である⁵⁾。

また、「黒い岩」だけでなく、ナツアグドルジの筆跡の見本帳とも言うべき彼の手帳、「フォークロア」の高精度デジタル化データを取得し、日本の高度なカラー印刷製本技術によって、オリジナルとほとんど区別のつかない複製を製作する試みも行った⁶⁾。これを利用することにより、崩し字の解説、筆跡の鑑定などが容易になり、ナツアグドルジの手稿研究はさらに一步を進めることになる。

IV 手稿とデジタル化

ミシェル・フーコーが『作者とは何か』で語ったように、いま我々が文学であると考えたものが誰によって書かれようとの関心の払われない時代がかつてあった。ナツアグドルジは、近代モンゴル文学史上初めての、テキストと作家の関係を問われ続ける、フーコーのいう「機能としての作者」であると言える。

2006年は大モンゴル800周年の記念の年であると同時に、「モンゴル近現代文学の父」ダシドルジーン・ナツアグドルジ生誕100周年でもあった。ウランバートルでは、「黒い岩」の名前を冠したシンポジウムを含め、幾つかの行事が行われた。また、同年12月、北京大学においても、「達・納楚

克道爾基誕辰100周年国際学術研討会」が開催された。中国国内各地のモンゴル族研究者、中国人研究者に加え、モンゴル国や日本からの研究者らも加わった学会は、ナツアグドルジという作家がモンゴル国の枠を超えて、モンゴル文学の中で占める位置の大きさを再確認させるものであった。

筆者はその席上、ナツアグドルジの伝記的な記述に際して、度々引用されてきた《Гэргий хүүхдээсээ хагацахуй》(「妻子と離れて」)と呼ばれている詩の手稿と彼の手帳「フォークロア」のデジタルデータを利用した発表を行い、以下のような事実を明らかにした⁷⁾。

公刊されたD. ナツアグドルジの印刷テキストすべてが、手稿の「???'といった破格の表現を、カノンの規範性の観点から改変していること。

詩が書かれたのはこれまで1936年とされてきたが、ナツアグドルジの手帳に書かれた数字の筆跡と比較してみると、手稿に書かれた年は1935と読むことが正しいこと。

1936年と読んだのは、ナツアグドルジの妻子との別れが1935年の末から1936年にかけてのことであったとする言説に合致させる意図によること。

書かれた時点では詩の題はなく、題は別人によって書かれたこと。

作家自身の筆跡による欄外コメントによれば、テーマは妻子との別離ではなかったこと。

北京での学会には、長年に亙り、D. ナツアグドルジの手稿研究に直接携わってきたS. ロチン氏、Ch. ジャチン氏もモンゴル国から招かれていた。ナツアグドルジの手稿の権威とされる両氏が外国人研究者である筆者の説に支持を表明してくれたことは、私的な感情とは別に、研究史的に意義深いことであると言えよう。

D. ナツアグドルジの手稿は、作家の死後、モンゴル国民文学のカノン形成過程の中で、長く、一般読者や研究者、そしてまた、作家自身から

も引き離されてきた。北京での経験は、そうした時代がもはや完全に終わったことを物語るものであった。

そうした状況のもとで、ナツアグドルジの手書きの作品がモンゴルの人々全体の宝であることは誰も否定し得ないであろう。しかし、一般に、活字出版後の作家、とりわけ現代作家の手書き草稿は、歴史的文化財としての保護の対象になりにくく、常に散逸や消滅の危険に晒されている。ナツアグドルジの場合も例外ではない。

モンゴル国立科学アカデミーに保管されている手稿をはじめ、個人が所蔵している手稿も危険な状況にある。乾燥地帯であるモンゴル国内の紙資料の保存環境は劣悪であり、とりわけ、中世からの文化財に比べて、近現代の紙資料は時間に耐える素材特性をもたず、またその重要性に関する共通理解が十分に形成されていないため、廃棄、汚損、消滅の恐れが高い。ナツアグドルジの原稿はペンや筆ばかりでなく、鉛筆、化学鉛筆で書かれているので、経年変化による消失も起こり得る。

湿度調整を完備した保存装置での保管への措置を急がねばならない。しかし、保存だけでは十分ではない。研究の深化のため、手稿や資料のデジタル化は、小論で示したようなデジタル解析の方法ばかりでなく、テキスト研究、間テキスト研究にとっても不可欠な課題であることを改めて強調しておきたい。

おわりに

最後に個人的な感慨を添えることをお許しいただきたい。

初めて「黒い岩」を読んだのが1973年。1987年にウランバートルで手稿の塗りつぶし箇所の写真を見てから、実際にオリジナルの手稿を肉眼で見るまでに7年、そこから手稿のデジタル復元作業にとりかかるまでに、さらに10年余りの歲月

が流れた。

顧みれば、「黒い岩」という短い小説に導かれての長い旅であった。その間、小説の主人公のように、謎の答えを求めて彷徨っていたような気がする。しかし、1961年版の「黒い岩」のように、いまだに謎は解けていない。1996年版の「黒い岩」の結末のように、求めたものに会えるまで、臆することなく、旅を続けねばならないのかもしれない。

いずれにせよ、「黒い岩」への一里塚となった今回の手稿デジタル化の試みは、モンゴル、日本の、多くの方々のご協力のおかげで実現した。

モンゴル国立科学アカデミー言語文学研究所所長であったKh. サンピルデンデブ博士をはじめ、プレブジャブ博士らスタッフ、アイメジャー有限会社のノ瀬修一氏、凸版印刷株式会社の加茂竜一氏、小室哲郎氏、高橋英一氏、モンゴル国立大学のD. ガルバートル教授、阿比留美帆氏、内田敦之氏、G. U. ナチンションホル博士、そして、お名前は挙げないが、モンゴル研究会と日本モンゴル文学会の仲間は勿論、長らく親交を結んで来た尊敬すべきモンゴル作家同盟のメンバーである友人たちへ、深甚の感謝を記しておきたい。

ただひとつ心残りなのは、2006年夏、ウランバートルでの国際学会の席上、固く約束したサンピルデンデブ先生との北京での再会が果たせなかったことである。

北京大学蒙古学研究中心のドラーン博士の尽力で盛況のうちに幕を閉じた記念学会の後、多くのナツァグドルジ研究者と宴の席に着いた。その席にあって、共同で出版するはずだったナツァグドルジの手帳「フォークロア」の精密な複製を肴に、サンピルデンデブ先生と杯を乾すことができればどんなによかったろうと思わずにはいらなかった。

2006年秋急逝されたサンピルデンデブ先生のご冥福を祈って拙文の筆を擱きたい。

註

- 1) Yutaka SHIBAYAMA "Digitalization of Natsagdorj's *Kharankhui Khad*" (Paper presented at The Ninth International Congress of Mongolists Devoted to the 800th Anniversary of the Yeke Mongyol Ulus) Ulaanbaatar, 2006.
- 2) Ч. Жачин, *Зохиолын эх бичигт хийсэн ажиглалт тэмдэглэл*, УБ., 1987 が最初にこの問題を本格的に扱っている。Морь эрэхээр одов と題される別の作品に書き直されているが、1996年版の全集では巻末解題部分の「黒い岩」の箇所に、全文を挙げています。
- 3) БНМУ ШУА -ийн хэл зохиол хүрээлэн, *Д.Нацагдоржийн гар бичмэл*, УБ., 1988.
- 4) 2006年に出版されたナツァグドルジの全集は3巻本の体裁で発行されたが、第1、第2巻と第3巻では、編者が異なっており、編集思想も違っている。手稿とナツァグドルジの写真類が収められた第3巻はKh. サンピルデンデブ、S. ロチン、Ch. ジャチン、A. オチルの各氏が編者になっており、キリル文字による作品テキストと文献資料を収めた第1、第2巻はD. ツェデブ氏の個人編集によるものである。この全集出版について、かねて関係者間の確執がとりざたされ、様々な風聞があったが、2006年9月11日付 Зууны Мэдээ 紙上にL. バルダン、Ch. ジャチン、S. ロチン、A. オチル、Kh. サンピルデンデブ5名の手稿研究に携わる学者の連名による、エンフトブシン文化教育科学大臣宛ての公開質問状が掲載された。
- 5) カラーでの手稿の公開は、2007年、モンゴル国のWEB上ヴァーチャル図書館であるE li-

brary (<http://www.elibrary.mn/>) で行われていたことを確認している。その際の公開がどのような手続きによるものなのかは分からないが、公開されていたデータは解像度の低いJPEGファイルで、残念ながら、小論で示したようなデジタル解析を行えるようなものではない。

- 6) この複製見本は筆者が大日本法令印刷長野本社の瀬在崇史氏らの協力を得て作製し、2006年8月の第9回国際モンゴル学者会議の席上、ジャチン博士によって世界の研究者に紹介された。
- 7) 「モンゴル文学におけるカノン形成とD. ナツァグドルジの手稿」(『経典解説達・納楚克道爾基紀念達・納楚克道爾基誕辰100周年国際学術研討会』、北京大学、2006年)。

参考文献

- БНМУ ШУА -ийн хэл зохиол хүрээлэн, *Гар бичмэл Задгай Материал /22.5 x 27 см / хавтас No.1 00517-00523*
- Д. Нацагдорж *Зохиолын түүвэр*, УБ., 1955
- Д. Нацагдорж *Зохиолууд*, УБ., 1961
- Дашдоржийн Нацагдорж *Бүрэн түүвэр*, УБ., 1996
- Дашдоржийн Нацагдорж *Шилдэг бүтээлүүд*, УБ., 2004
- Д. Нацагдорж *Нацагдорж Бүрэн Зохиол 3*, УБ. 2006
- Балдан Л., *Оюн ухаанаараа сэтгэсэн ертөнцийг бүтээсэн хүн* УБ., 2002
- БНМУ ШУА -ийн хэл зохиол хүрээлэн, Д. *Нацагдоржийн гар бичмэл*, УБ., 1988
- Жачин Ч., *Дашдоржийн Нацагдоржийн гар бичгийн судалгаа*, УБ., 2006
- Лочин С., Д. *Нацагдоржийн зохиолын эх бичгийн судлалын асуудал*, УБ., 1984
- Очир А., Дашням Г., Д. *Нацагдорж: нийгэм, улс төр, эрдэм судлалын үйлс, амидрал*, УБ., 1996
- Сампилдэндэв Х., *Монголын уран зохиолын түүхийн зарим асуудал*, УБ., 1998
- Содном Б., Д. *Нацагдоржийн намтар зохиол*, УБ., 1966
- 岡田和行「ナツァグドルジの1932年の投獄と獄中詩について」(『東京外国語大学論集』第72号、2006年)
- 芝山豊「D. ナツァグドルジの評価をめぐって」(『清泉女学院短期大学研究紀要』第17号、1998年)、「D・ナツァグドルジ「黒い岩」をめぐって」(『モンゴル研究』第22号、2005年)

(しばやま ゆたか)